

紙・デジタル併用「一番いい」

効果的な学習場面の検証 ■ 家庭環境の差ないように

萩生田文科相に聞く

今春から、小中学校で「1人1台」の情報端末を使った教育が本格化し、デジタル教科書の実証研究も全国の約4割の小中学校で始まることとしている。賛否の声があるデジタル教科書について、萩生田光一文部科学相はどんな展望と理想を描いているのか。5月26日に行ったインタビューを詳報する。



— デジタル教科書になるとどんな効果があるか。
書き込んだり消したりなど試行錯誤が容易で、動画などのデジタル教材と連携して活用することで、学びの幅を広げたり内容を深めたりできる。一方、紙の教科書は、一覧性に優れ、書籍に慣れ親しませる役割なども指摘されている。教科書というツールが、紙じゃなきゃいけないのか、紙じゃなくてもできるのか。全国的な実証研究で見極めるのが、この数年になる。

— 2024年度からの全面デジタル化はないのか。
私個人は、紙とデジタルをしばらく併用していくのが望ましいと思っている。
「24年度から本格化」など報道され、文科省が前もってデジタル教科書に全面移行するかのようになっているが、そうではない。次に小学校の教科書が変わる24年度は一つのタイミングだったが、今年度、来年度、再来年度と実証研究を続けることを考えると、その次の検定サイクルを念頭に、検討することが適当ではないか。
(国が小中学生に1人1台の情報端末を配る) GEI-GAスクール構想も前倒しになり、デジタル活用の良

い点はたくさんある。ただ、全面的にデジタルに移行すればバラ色の学校現場が待っているかといえば、そういうわけでもない。幅広く見ながら、スモールステップで前に進めたい。
— 検討会議でも複数の併用案があるが、理想は。紙もデジタルも使えるのが一番いい。デジタルを主にして、紙の教科書はクラスに置いて使い回すなど、いろんな方法がある。逆もあって悩ましい。デジタルの強みはたくさんある。見学した学校では、算数の立体を3Dで映していた。算数では力を発揮しそうだが、ただ、デジタルになじまない教科もあるのでは。
登壇の段階や教科ごとの特性を踏まえつつ、紙、デジタルのそれぞれの教科書をどの学習場面でのよう使用することが効果的か、さらに検証を積み重ねていくことが重要だ。
— 子どもの健康への影響、自治体格差や家庭の経済的格差への懸念も指摘されているが。
恐れを持って前に進むと呼びかけてきたつもり

だ。視力など健康面は大丈夫だろうが、という点もしっかり見ていかなきゃならない。家庭環境の違いで差が生じないようにすることは重要だ。日本がデジタル庁をつくって本格的なデジタル社会を構築するなら、「WiFiアクセスフリー」の世の中を作っていくべきではないか。
— 検定制度もデジタルに対応する方針か。
もちろん。誤解を恐れずに言うと、今の教科書会社がすべてデジタル対応できるのか。今まで教科書と無縁だったところが参入してきて、すごいデジタル教科書や教材を作る可能性も否定できない。
— 財政的な問題は。財務省が「紙も残し、デジタルも全額国費負担でいい」とは、簡単には言ってくれないと思う。義務教育なのに(デジタル教科書は有償なら)「うちの子は紙の教科書がいい」という話になる。だから国の責任で、大きな政策で進めていくしかない。
(聞き手)伊藤和行 編集委員・宮坂麻子、同・増谷文生)



インタビューで語る萩生田光一文部科学相
■ 東京都千代田区 伊藤達之介撮影

動画と連携 強み 視力の低下懸念も

デジタル教科書 あり方議論

デジタル教科書は、2019年度から紙に代えて使えるようになった。最大のメリットは、動画などのデジタル教材と連携して使える点だ。画面への書き込み、図や文字の拡大表示、通学時の荷物への負担軽減などの利点もある。一方で、課題も少なくない。昨夏から議論を続ける文科省の検討会議のパブリックコメントでは、視力や読解力低下の恐れ、家庭や地域による教育格差の拡大への懸念などが寄せられた。学習内容の定着度を心配する声もある。
検討会議は今夏以降、ワーキンググループで検定のあり方などを議論。全国の小中学校での実証研究の結果を踏まえて、導入方法なども検討する。